

# 多人数クラスにおける文法授業実践報告

— 日本語中級前期 J511、J514 の学習者を対象として —

鶴町 佳子 許 明子

## 要 旨

筑波大学留学生センターにおいて2007年度1学期に初めて開講された「日本語中級前期文法 J511」「日本語中級前期文法 J514」は、受講者が非常に多く、効果的な授業を行うために数々の工夫が必要であった。授業を受ける前の準備として「新しいことば」「宿題シート」で予習・復習を義務づけるとともに、授業では「話してみましよう」のグループ活動を通してその課で習った文法項目の応用練習を行った。本稿ではその授業実践について報告する。

【キーワード】 多人数クラス 文法授業 中級前期

## Report on a Large Japanese Grammar Class: for learners of intermediate-low level

TSURUMACHI Yoshiko, HEO Myeongja

【Abstract】 This is a report on a large Japanese grammar class for intermediate-low level students. "Japanese Grammar J511" and "Japanese Grammar J514" are intermediate-low level courses, while were started as new courses at the International student center, Tsukuba University, in the 1st trimester of 2007. Careful planning was necessary for the courses because this level is taken by many students. Preparation and review for "new words", "homework sheet" were required, and in the class, "Let's talk" group activities on grammar items learned were use for applied practice. This is a practical report about the courses, and also clarifies future tasks.

【Keywords】 large class, grammar class, intermediate-low level learners

## 1. はじめに

筑波大学留学生センターでは、筑波大学に在籍する外国人留学生等に対して日本語科目のコースを多数開講している。留学生にとって同センターの日本語コースの受講は必修ではなく、自分で日本語学習の必要を感じたり、あるいは指導教員に受講を指示されたりした場合に受講申込をし、日本語クラスを受講している。日本語クラスの受講が必修ではないにもかかわらず留学生の日本語教育の需要は非常に高く、毎学期約250名前後の留学生が同センターで学んでいる。

しかし、2004年の国立大学の独立法人化を受け、同センターでは2007年度4月より、次のようなカリキュラムの再編成が行われた。まず、中上級以上の各レベルにおいて目的別・技能別に開講していたクラスを技能別だけに限って開講することになり、開講科目数が前年度より減ることになった。そして、学生のレベル分けについても、従来の1～6レベルという分け方からJ100～J700という分け方になり、初級、中級レベルの学生に対する日本語教育にさらに重点を置くことになった。

2007年度1学期はカリキュラム編成後初めての学期であったが、初級(J100～J400)終了後のレベル、つまり中級前期とされるJ500レベルには84人もの学生が配置された。このレベルの学生を対象にした科目としては、「文法」が2科目、「聴解」「会話」「読解」「作文」がそれぞれ1科目ずつの計6科目が開講され、受講生はこの中から受講する科目を選択することになる。「文法」科目には当該レベルのほとんどの学生が受講を希望し、1クラスの受講者数が50名を越えた。語学学習における学習効果を考えた場合、多人数のクラスはメリットに対しデメリットのほうが大きいので、2007年度にこの「文法」2科目を担当することになった筆者らは、学習者に提供する授業の質を従来のものから落とさぬよう、数々の工夫を行った。

本稿では、J500レベル(中級前期レベル)の文法科目として2007年度1学期に開講された「日本語中級前期文法 J511」「日本語中級前期文法 J514」における授業実践について、概要を述べ、さらに多人数の文法クラスの運営における問題点、そしてそれへの対応を中心に報告を行う。

## 2. コースの概要

日本語補講「日本語中級前期文法 J511(以下、J511)」「日本語中級前期文法 J514(以下、J514)」はどちらも文法を扱う科目であるが、それぞれ別の科目として開講され、取り上げる文法項目も担当する教師も異なる。しかし、J500レベルの学生はどちらの授業も受講してくることが予想されたため、2科目の連携を図り、授業の進め方や評価方法、教材の体裁などは共通にした。ここでは、両科目共通の事項について報告する。

まず、授業時間数は両科目とも週に1コマの75分授業が9週間にわたって開講された。対象は前述の通りJ500レベルに配置された学生で、どちらの科目にも50名余りが受講登録を

した。受講者は非漢字圏と漢字圏の学生が半々ぐらいであった。テキストは、このクラスにそのまま使える適当なものがなかったため、担当教師が作成した自作教材を使用した。テキスト作成にあたっては、前年度までの4レベル（2007年度のJ500レベルにほぼ対応）において使用されていたテキスト「一般日本語SJ4-1」「一般日本語SJ4-2」、さらにそれ以前に使用されていた「日本語中級文型表現練習1」「日本語中級文型表現練習2」のシラバスを参考にした。「J511」「J514」のテキストは1コマで1課進むよう8課で構成し、毎課ごとに宿題を課した。評価基準は、この宿題提出率を40%、最終テストの結果を60%とし、合計点で評価を行った。

J500レベルの授業内容は、「J511」では〈紹介する〉〈意見を述べる〉に関係する文法、「J514」では〈予定を述べる〉〈計画を述べる〉に関係する文法を取り上げ、それぞれの状況に応じた文法項目をどのように使い分けるかについて詳しく学ぶことを目標としている。<sup>1</sup>

さらに、「J511」で取り上げた各課の授業目標と文法項目を以下に示す。

- 第1課 自己紹介 (1)：尊敬語、尊敬表現、謙譲語、謙譲表現
- 第2課 自己紹介 (2)：丁寧表現、名詞・形容詞の丁寧表現、受身尊敬語
- 第3課 趣味・特技について話す：「こと」、「の」
- 第4課 可能・希望について話す：可能表現、ら抜きことば、希望表現「Vたい」
- 第5課 日常生活について話す：「Vながら」、「Vたまま」、「VたりVたり」
- 第6課 伝言する：「～とのことだ」、「～そうだ」、「～らしい」、「～んですって」
- 第7課 判断を述べる (1)：「～と思う」、「～だろう」、「～かもしれない」、「～にちがいない」、「～はずだ」
- 第8課 判断を述べる (2)：「～そうだ」、「～らしい」、「～ようだ」、「～みたいだ」

次に、「J514」で取り上げた各課の授業目標と文法項目を以下に示す。

- 第1課 時の表現 (1)：「～とき」、「～間 (に)」、「～前 (に)」、「～後 (で)」
- 第2課 時の表現 (2)：「Vる／ている／たところだ」、「Vたばかりだ」
- 第3課 理由を述べる：「～て」、「～から」、「～ので」
- 第4課 将来の予定・計画を述べる：「～つもりだ」、「～予定だ」、「Vたいと考えている」  
「Vようと考えている」
- 第5課 決定・決意を述べる：「Vことになる」、「Vことにする」
- 第6課 予定・計画の目的を述べる：「～ように」、「～ために」
- 第7課 条件を説明する：「～たら」、「～と」、「～ても」
- 第8課 将来の見通しについて述べる：「たぶん」、「おそらく」、「きっと」、「必ず」、「まさか～ない」

見て分かる通り、一つ一つの項目はほとんど初級で扱うものと同じである。中級前期の学習者は、初級日本語の項目は学習済みであるものの、それをさまざまな場面において、さまざまな相手に対して適確に使い分けるということに習熟していない。また、正確さにおいても、未だ「テ」形の活用間違いなどが見られ、中級といっても受講者間のレベルの差が大きく、初級レベルの文法項目を再確認する必要がある。したがって、このレベルの学習者に対する文法の授業では、初級の項目を整理し直しつつ、用法などについて若干難易度の高いものを与えたり、語彙も漢語などの中級らしいものを増やしたりするようにした。J500 レベルになった学生は長くとも1年間で、初級レベルで学習した文法項目を復習しつつ、中級後期レベルにつなげることを想定し、カリキュラムを組み立てた。

具体的な文法項目の選定については、前年度までの同等レベルにおいて使用されていたテキストで取り上げている項目はほとんど押さえた上で、さらに関連する句型を増やした形になっている。これは次の理由による。前年度まで、このレベルにおける文法学習は総合日本語としての科目において行われていた。総合日本語では、聴解、会話、読解、作文の技術習得にも時間を割かねばならない。そのため、取り上げる句型、表現の数はあまり多くなく、また説明もあまり詳細ではなかった。例えば、時の表現「～間(に)」は、「～間、…」と「～間に、…」では後件に来る文が継続性のものか瞬間性のものか異なってくるが、それについての説明はテキストに記述されていなかった。口頭表現では、確かにこのくらいの違いについて正確ではなくとも、だいたいの意図は伝わるだろう。しかし、それでは文法を習っても正確に理解し、使うことは難しい。「J511」「J514」では、こうした「正確さ」を高めるため、既存のテキストの項目をベースにさらに説明・練習を加えたり、また表現のバリエーションを増やしたりした。

項目は以上のような考えで選定したが、中級レベルの学生に求められるのは、初級のときと違い「この項目を正しく理解し、使えるようになれば次のステップへ」というものではなく、また教師が与えたものだけを学習すればいいというものでもない。学習者のニーズや目的により、学習者自身に必要な語彙、表現がかなり異なってくるからである。そのため、学生が自分で「力がついた」と実感するためには、授業以外にも自主的に自分の必要なものを学習していくことが必要である。したがってJ500レベルの文法クラスでは、そのような自主学習の態度も育成していくように努めた。

### 3. 想定された問題点とその対応策

2007年度新規開講科目である「J511」「J514」は、冒頭で述べたカリキュラム再編成により、多人数クラスになることが開講前から予想されていた。そのため、筆者らは、多人数クラスであることから次のような問題点が出てくることを想定した。

- ① 授業中に学生一人ひとりの理解状況の確認を行うことが難しい

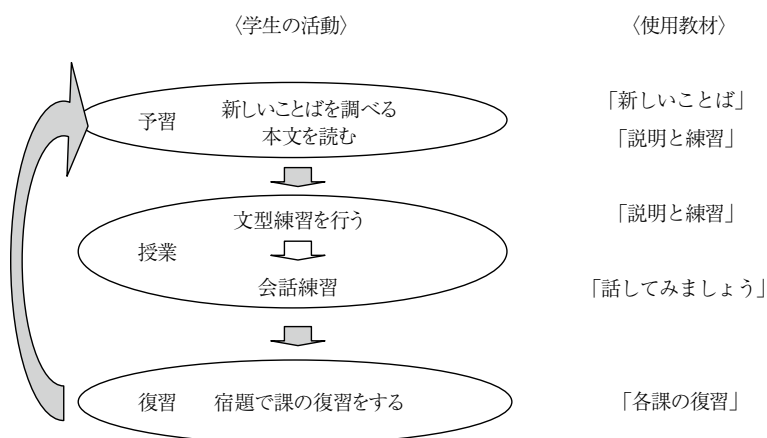
- ② 教師と受講者との信頼関係を築くのが難しい
- ③ クラス内の受講者の能力差が大きい

本章ではこれらの問題点と改善策について具体的に述べる。①の問題点は、授業中に学生一人ひとりに自由に例文を作らせ、それを吟味するような活動を取り入れることはとうてい無理であること、そして多人数クラスでは分からないことがあってもお互いに遠慮してあまり質問してこないため、理解したかどうか教師に伝わりにくいということである。これでは学生のほうも自分の理解状況について無自覚になり、積極的に「理解しよう」とせず、授業を漫然と受けることになりかねない。次に②の問題点は、授業中に教師が学生一人ひとりに目を配るのが難しいため、教師と学生がお互いに安心して教えられる、学べるような信頼関係が築きにくいということである。そして③の問題点については、約 50 名の受講者の中には下の J400 レベルから上がってきたばかりの学生も、もうすぐ J600 レベルに上られそうな学生もいるので、ある者には難しすぎ、ある者には簡単すぎてしまい、すべての学生を満足させる内容にするのは難しいということである。少人数ならばそれぞれの理解度にあわせた活動もできようが、50 名を超える学生への一斉授業ではそれは容易なことではない。

これらの問題点に対し、筆者らは多人数文法クラスの活動と効果的なクラス運営のために、主にテキストと宿題に工夫をして対応することにした。以下ではテキストの工夫とともに、授業の一連の流れに沿って、上述した各問題点に対する改善策について詳しく述べる。

### 3.1 授業の流れ

上述した通り、50 名以上の受講生がいる多人数クラスではさまざまな問題が生じることが予想され、授業での活動だけでは効果的な学習を進めることが難しい。そこで、学生に予習、復習を徹底し、授業のときには可能な限り文型練習や会話練習などの活動を中心に行うクラスをめざした。自作教材を作成するにあたって、学生の活動と授業の一連の流れは〈図1〉のように想定した。



〈図1〉「J511」「J514」の授業の流れ

この流れにそって自作教材を作成し、多人数クラスで起こりうる諸問題に対策を立てたが、以下、詳しく報告する。

### 3.2 宿題シートの活用

まず、①の「授業中に学生一人ひとりの理解状況の確認を行うことが難しい」という問題については、復習の宿題を充実させることで、一人ひとりの理解を確かめることにした。宿題は1課～8課までの宿題をワークブックとして別冊にまとめ、授業があった週の締め切り日までに提出させた。宿題シートには活用表による基礎知識の確認、文型の理解を確認するための短文作り、与えられたテーマや文型を用いて学習者自身の考えをまとめる作文などを盛り込んだ。

宿題シートの中から、「J514」の第4課「将来の予定・計画について述べる」、第5課「決定・決意を述べる」の復習ページの一部を紹介する。

#### ◎ 第4課 復習◎

1. 次の表を埋めてください。

		V-(r)u +つもりだ	V-(y)oo +と思う	V base +たいと思う
G1	買う	買うつもりだ	買おうと思う	買いたいと思う
	勝つ			
	いそ 急ぐ			
	なお 直す			
	かよ 通う			
	作る			
	遊ぶ			
	住む			
	行く			
G2	やめる			
	か変える			
	いる			
G3	来る			
	結婚する			
	就職する			

2. 第4課の〈練習6〉で話した人たちの筑波大学を卒業した後の予定を書いてください。自分のことについても書いてください。

- 例) ・チンさんは卒業した後、国に帰って、仕事を探すつもりだそうです。  
 ・私は卒業した後、結婚しようと思っています。

◎ 第5課 復習◎

1. 第5課の〈練習5〉で話した人たちの決意を書いてください。自分のことについても書いてください。

- 例) ・リさんはたばこをやめることにしました。
- ・私は明日からダイエットをすることにしました。

2. あなたの国の規則や法律 (law) について、日本と違うものを紹介し、簡単にコメントしてください。次のトピックから選んでも、他のトピックでもいいです。

- ・結婚できる年齢 (age)
- ・車が運転できる年齢
- ・お酒が飲める年齢
- ・たばこが吸える年齢
- ・たばこが吸える場所
- など

例) 私の国では18歳からたばこを吸ってもいいことになっています。ですが、自動販売機で買うことはできません。17歳以下の者が買ってしまふかもしれないからです。日本では20歳からしかたばこを吸えないことになっていますが、自動販売機でたばこを売っているのので、19歳以下の者も買えてしまいます。日本でも自動販売機でたばこを売のをやめたほうがいいと思います。

---

---

---

---

---

---

さらに、復習だけではなく、次の課の予習を促すために、次の課の「新しいことば」を宿題として課した。「新しいことば」では用例や本文の説明に使われている用語などの新出語彙のリストを作って、読み方と意味を確認させることにした。学生は「新しいことば」の読み方や意味を確認するために本文を読み、予習を行う。こうして「新しいことば」を調べることによって、語彙の量を増やすとともに予習を行う習慣をつけるのがねらいであった。

「J511」の1課「自己紹介」で取り上げた「新しいことば」の一部を紹介する。

◎ 新しいことば ◎

※ 次のことばの意味と読み方を調べましょう。ことばの意味と読み方が分かったら□の中にチェック(✓)を入れてください。漢字のことばは読み方を( )の中に書いてください。

意味	読み方		読み方を書いてください
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	自己紹介	( )
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	紹介する	( )
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	名前	( )
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	専門	( )
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	専攻する	( )
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	所属	( )
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	出身	( )
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	仕事	( )

また、宿題シート提出の際には、「わからないことがあれば宿題シートで質問するように」と指示し、学生が教師に質問する場を確保するようにした。②の「教師と受講者との信頼関係を築くのが難しい」という問題についても、宿題にできるだけ個別のコメントを書くこと、質問には確実に回答することで対応することにした。宿題シートは受講者の予習と復習を促すと同時に、教師とのコミュニケーションの場としても活用した。

また、③の「クラス内の受講者の能力差が大きい」という問題については、宿題の中に自由度の高い作文課題を設けることで、各人の満足を得ることにした。この課題には「このテーマでこの表現を必ず使うように」という制限しか設けておらず、分量自由であるため、力の高い学生は語彙や文型を存分に使って自分の力を試すことができ、また力が弱い学生は最低限必要な分量だけ書けばよい。このように宿題シートを活用することによって、授業中には対応しきれないクラス内の学生の能力差への対応を試みた。

### 3.3 グループ活動

予習・復習を徹底することも非常に重要であるが、それだけでは、教師側が学生の理解状況が分かるのみで、学生自身が授業の場で自分の理解を実感できるわけではない。そこで、筆者らは各課で取り上げた文法項目のまとめとして「話してみよう」というグループで話しあう活動を用意した。「話してみよう」は、各課で取り上げた文法項目を使って授業目標が達成できたかどうかを確認する活動で、クラスメートとグループもしくはペアでモデル会話の応用練習を行うものである。

「話してみよう」の活動のねらいは次の五つにまとめられる。



- ・各課で学んだ文法項目が日本の日常生活ではどのように使われているのか、モデル会話を通して文法項目の使い方について学ぶ。
- ・学んだ文法項目を使って会話練習を行うことによって、単なる文法項目の理解だけにとどめず、応用力を身につける。
- ・文法クラスは知識の伝達などが中心になりやすく、学生の活動が消極的になりがちであるが、実用的な会話練習を通して積極的に授業に参加するよう促す。
- ・話し相手や状況に応じてさまざまな表現を用いる練習を行うことによって、日本語の表現のバリエーションを学ぶ。
- ・クラスメートと日本語によるコミュニケーションを行う機会を増やし、同レベルの学習者同士が理解確認を行うとともに、刺激を与えあう。

以下に、「J511」の第1課の「話してみましよう」のモデル会話を例としてあげる。

◎ 話してみましよう ◎

・下の<sup>わだい</sup>話題についてグループで話してください。相手についてわかったことを<sup>ひょう</sup>表の中に書いてください。

例) A：はじめまして。キムです。

B：はじめまして。チンと申します。

A：あの、キムさんはどちらからいらっしゃったんですか。

B：<sup>かんこく</sup>韓国からまいりました。

A：どちらで日本語を勉強なさったんですか。

B：韓国のコリア大学で4年間、勉強いたしました。

A：そうですか。お上手ですね。

B：いいえ、とんでもないです。

A：ご専門は。

B：大学では心理学を専攻いたしました。今は、心理学研究科に所属しております。

《自己紹介 記入シート》

名前			
専門			
所属			
住まい			
国			
仕事			
いつ日本に来たか			
どこで日本語を勉強したか			

教師はこの活動中、各グループを回りながら質問に答えたり、会話練習に加わったりした。学生は何か分からないことがあった場合、それが小さなことであれば、教師に質問するよりも同じ学生のほうが気楽に質問できるものである。また、グループ全員が同じことについて理解ができていない場合、「皆分からないのだから」と遠慮なく教師に質問ができる。このように、多人数のメリットを活かしたグループ活動を意図的に盛り込むことによって、学生が自分の理解状況を意識、確認できるようにした。

#### 4. 反省と学生からの授業評価

1学期の授業を終え、担当教師であった筆者らの実感としては、当初想定した問題点については、上で述べた対応策により大分解決できたのではないかと思う。特に、学生同士による理解確認をねらった「話してみましよう」では、学生が自主的に3～4名のグループを作り、非常に積極的に会話練習を行っていた。そこではねらい通り、学生同士がことばの意味を確認しあったり、質問したり教えたりする姿が見受けられた。この活動では、ただ机を並べていただけの知らない者同士がお互いを知り合うことにもなり、出席者同士の連帯感も生まれた。この連帯感というのは、安心感や、ライバル意識によるさらなる学習意欲にもつながるもので、非常に歓迎すべき効果である。また、普段研究室では日本語を使う機会が非常に少ないという留学生が多い中、単なる日本語の練習だけにとどまらず、留学生同士が日本語でコミュニケーションを取ろうとする活動になったという点でも、「話してみましよう」は非常に有効な活動であったと思われる。

また、宿題では、想定された問題点のすべての解決をねらったが、概ね成功したと言える。ただし宿題については、ただでさえ50名以上と分量が多かったのに加え、自由作文課題も盛り込んだために、教師側の添削負担は膨大なものとなってしまった。現実的に、教師が添削にあたる時間には限りがあるので、このやり方には再考の余地がある。

学生からの授業評価アンケートの結果を見ると、授業の進め方、内容には概ね満足していることがわかった。しかし、自由記述欄には「クラスの人数が多すぎる」というコメントが多く見られた。また、授業内容が「簡単だ」と答えた学生のコメントには、「もう少し難しい表現も教えてほしい」という意見もいくつかあった。これらの学生はJ500レベルの中でも高いレベルの学生であろう。同レベル内でも能力差が大きいことについて、宿題の自由作文だけでは対応しきれなかったということがわかる。このほか、「練習問題をもっと多くしてほしい」、「最終テストだけでなく、クイズもしてほしい」という意見もあり、今後は、これらの要望を踏まえ、改善を図らなければならない。

#### 5. おわりに

以上、本稿では2007年度1学期に行われた中級前期レベルの文法クラス「J511」「J514」

の実践報告を行った。1学期が始まる前から多人数クラスが予想される中、筆者らは起こりうる問題を想定し、対策を立てて、自作テキストや授業のやり方にさまざまな工夫を加えた。

しかし、50名を超える多人数では、教師の努力だけでは対応しきれない問題が残された。そこで、2学期からは、多人数の受講が予想されるクラスに関しては同じ内容のクラスを2回、別の時間に開講するというダブル開講の体制をとり、受講者数の分散を図るようになった。<sup>2</sup>

教材作成にあたっては短時間に8課分の教材作成を行わなければならないという時間的な制約があり、文法説明や語彙に英訳が付けられなかった。特に、非漢字圏の学生は文法説明を理解する上でも、予習をする上でも非常に長い時間と負担を感じたことであろう。学生に予習、復習を促している以上、学生が自習できるような教材として改訂を行わなければならない。それは今後の課題として来年度に向けて改訂を進めていきたい。

## 注

1. 500レベルの年間の授業内容については平成19年度開設授業科目一覧に詳しく記されている。500レベルの文法授業としては、1学期に「日本語中級前期文法 J511」「日本語中級前期文法 J514」2学期は「日本語中級前期文法 J512」「日本語中級前期文法 J515」、3学期は「日本語中級前期文法 J513」「日本語中級前期文法 J516」の2科目ずつ開講されている。各科目で扱う授業内容は「J512」では〈依頼する〉〈許可する・断る〉、「J513」では〈事実を述べる〉〈報告する〉に係る文法項目を取り上げる。また、「J515」では〈相談する〉〈説明する〉、「J516」では〈経験を述べる〉〈比較する〉に係る文法項目を取り上げる。
2. 2007年度2学期には、J500レベルとJ600レベルの文法、会話、作文のクラス、およびJ100レベルとJ300レベルのクラスがダブル開講された。

## 参考文献

- 小口叔枝他（1999）『日本語中級 文型表現練習 1』『日本語中級 文型表現練習 2』筑波大学留学生センター
- 加納千恵子（2007）「日本語中級前期の指導と課題－ SJ4-1 および SJ4-2 コースの試み－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』22号：19-33
- 衣川隆生他（2006）『一般日本語 SJ4-1』『一般日本語 SJ4-2』筑波大学留学生センター